

1995年4月28日

経済学部教授 高島 均

毎年、折にふれその時その時の新聞やテレビを賑わしている出来事について、また、私自身の心象に深く留まった事について、私は如何に考えるか、そして君達は如何に考えるか、「若き友へ」と題して、君達に訴えてきました。今年も、出来るだけ多くの事柄について、語っていきたい、と思います。尤も、一昨年でいえば、精一杯頑張って4回しか出せませんでしたし、昨年は学科主任としての雑務に追われ、1回しか出せませんでした。今年も学科主任としての雑務に追われていますので、どれだけ出せるか判りませんが、精一杯頑張ってお出したいと思います。その中で、一つでも君達の関心に留まる事があったならば、君達も自分の考えを文章にしてみてください。自分の考えを文章にしてみる事によって、また、それを読み直したり友人と議論したりする事によって、物事を論理的に考え表現する力がついてきます。たとえ、受け身であろうとも、ある事について自分の考えをまとめる訓練をするうちに、社会に対し、人生に対し、君達の感覚は、より繊細に、より鋭敏になっていきます。その事は、大学における勉強の上でも、知らず知らずのうちに、大きな効果を与えるものです。

所感95 - 01 優しき90年代の若者達へ

大学に入学してはや1年経ちましたね。後輩も出来、自分自身が「大学生」である、という事にも慣れ、本格的な大学生活に入っていく時となりました。この1年間を振り返ってみて、貴方の大学生活は何の様なものだったのでしょうか。良い意味でも悪い意味でも予想(期待)した様なものだったのでしょうか。それとも、期待した程でなかった、或いは、予想もしていなかったものであったのでしょうか。本格的な大学生活がいよいよ始まるうとしている今、三十年近く前に大学生活を送った先輩として、貴方に伝えたい事があります。

人は誰でも独りでは生きていく事ができません。人が人たり得るのは、人と人との係わりを通じてであり、古来、この事に気づいていた私達の祖先は、「ひと」の事を、人と人の間、「人間」と書き表したのです。

人間は、一人ではその生命を維持していくだけの必需品を造り出し、獲得する事が出来ない以上、一人では生きていく事が出来ないのは自明の事です。しかし、ここで、人間は独りでは生きていく事が出来ない、とっているのは、もっと精神的な意味に於いてです。人類の歴史の中で、人間が独りで生きていったのは、砂漠の隠者ぐらいでしょう。他は、統べからく、この世の欲を捨てた人間といえど集団生活を営んでいる様に、他人を必要としています。それは、人間は誰でも、楽しい事・苦しい事・嬉しい事・悲しい事を、他の人間と共有

したいという本能的な欲求を持っているからです。そして又、時を経て、この様々な体験を、共通の感情をもって振り返りたい、という欲求を持っているからです。

共通の体験に対して、共通の感情を持って振り返る事の出来る友は、一つには、幼馴染みの友です。しかし、幼馴染みは郷愁の中にあり、その郷愁は、幼少時を共に過ごさなくとも、同じ時代に生きた人間であれば、かなりの程度共有する事が出来ます。これに対して、共通の体験に対して、共通の感情を持って振り返る事の出来るもう一つの友である青春時代の友は、個々の人間にとって、より重要性を持っています。何故ならば、青春時代を何の様に過ごしたか、という事は、将来におけるその人間の在り方に大きな影響を持っているからです。従って、青春時代に共通の体験を持っているか否かという事は、お互いを理解する上で決定的な作用を持ちます。ですから、貴方が、その学生生活の中で、心からの友や尊敬し得る師を見出せる様、望んでおります。

三十年近く前、私は“怒れる”60年代の若者の一人でした。“怒れる”若者という表現は、1956年5月8日にロンドンのRoyal Court Theatreで初めて上演され、やがて全世界を席捲したJohn Osborneの“Look Back in Anger”(怒りを込めて振り返れ)という演劇に負っています。日本においては、1959年5月に「文学座」アトリエ公演として東京その他で上演されました。John Osborneの“Look Back in Anger”から始まる演劇界の新しい波は、“New Waves”と呼ばれ、それは、“新左翼”の社会的・政治的運動と連動していました。

私達60年代の若者は、自信たっぷりに、全身を賭けて、社会の全てに荒々しい怒りをぶつけました。しかし、90年代の若者である君達は、60年代の“怒れる”若者ではありません。90年代の君達は、優しい、しかし、ちょっぴり自信のない若者です。私は、君達の年頃の時、自分の青春が素晴らしいものだと思う事はなかった、というより、自分の青春が素晴らしいかどうか考える余裕もありませんでした。ただ、精一杯その日その日を生きていたのです。でも、三十年経った今、自分がとても素晴らしい青春を送った、という思いで一杯です。君達には君達の生き方があります。それでも、若かった時の私と同じ様に、日々の暮らしの中で、自分が素晴らしい青春を送っている、と思う事はないでしょう。しかし、三十年経った時に、自分がとても素晴らしい青春を送ったと言えるようになって欲しいと思います。私も、今から三十年経った時に、自分がとても素晴らしい中年時代を送ったと言えるようになりたいと思います。

最後に一つ、付け加えたい事があります。豊かな知性は、豊かな感性があって初めて花開くものです。人々が目も留めぬ道端の草でも、小さな花を咲かせ、そこには、又、小さな虫たちが訪れて来ます。それに目を留める事が出来る繊細さと豊かさを持つものに対してだけ、道端の小さな草は、自然界の神秘・生きる事の美しさ、此等を造った神の御業の素晴らしさを教えてくれます。貴方が生きているこの社会も、子供たちの叫び、人々の呻き声に心の耳を澄ませ、そこに起きている小さな事に目を留める事が出来るような繊細さと豊かさを持つならば、人間社会の仕組みの全てを顕し、そこに暮らす人間の素晴らしさと哀しさ・社会の仕組みの矛盾とそれを解決しようとしている人間の力強さを見せてくれます。“豊かな感性”とは、“他者の心の痛みが判る精神”と言っても良いでしょう。声なき叫びをあげている子供は、昨日までの貴方です。無言の呻きをあげている人々は、明日の貴方です。貴方が、繊細で豊かな感性を持って、この社会を見つめ、友人と共に豊かな知性を花開かせてくれる事を、切に望んでおります。